

令和元年度 JACET 中国・四国支部

秋季研究大会プログラム&発表要旨

日時：10月19日（土）12:30 から受付

場所：愛媛大学城北キャンパス共通講義棟A

〒790-8577 愛媛県松山市文京町3番

12:30 ～ 受付（名簿にお名前とご所属をご記入ください）

13:10 ～ 13:15 開会式（共A11教室）

司会 岩中 貴裕（山口学芸大学）
開会の辞 支部長 岩井 千秋（広島市立大学）

第1室（共A12教室）

発表1：大学英語スピーキングクラスにおける，コミュニケーション能力育成のための

ペア/個人リハーサルおよびピア/個人レビューの実践

(Interactive and Individual Oral Rehearsals and Peer and Individual Reviews for
Developing Communication Ability in University English Speaking Classrooms)

(13:20-13:50)

長崎 睦子（愛媛大学）・折本 素（愛媛大学）

発表2：Further Breaking Barriers for L2 Learners of English

(L2 英語学習者のさらなる障壁の克服)

(13:55-14:25)

Douglas Robert Parkin (Yamaguchi Gakugei University)

発表3：大学生の会話文記憶における絵の影響－英語学習の動機づけに向けて－

(The Influence of Pictures on College Students' Memory of Written Language for the
Motivation of Studying English)

(14:30-15:00)

ウィリアムズ 厚子（香川大学）

発表4：英語で教える英語の授業に対する態度に影響を与える要因

－WTC, コミュニケーション不安, 有能感と英語で教える英語の授業の関係－
(Factors Influencing Learners' Attitude toward Teaching English in English: The
Relationship between WTC, Communication Anxiety, Perceived Competence and
Teaching English in English)

(15:05－15:35)

岩中 貴裕 (山口学芸大学)

第2室 (共A13教室)

発表1：処理可能性理論の示す発達段階は日本人 EFL 学習者の

スピーキングとライティングの両方から支持されるのか

(Can Processability Theory Explain the Developmental Stages of Japanese EFL
Speaking and Writing?)

(13:20－13:50)

道本 祐子 (宇部工業高等専門学校)

発表2：小学校教員・中学校英語教員が考える ALT とのチーム・ティーチングの課題

－今治市での調査に基づいて－

(How Elementary and Junior High School Teachers Perceive the Problems of Team
Teaching with ALTs)

(13:55－14:25)

池野 修 (愛媛大学)

発表3：高専1年生に対する体育 CLIL の可能性 (3)

－英語を使用したバスケットボールの授業を事例として－

(The Possibilities of PE CLIL for the First-year Students at National College of
Technology Part 3: A Case of Basketball Classes in English)

二五 義博 (海上保安大学校)

伊藤 耕作 (宇部工業高等専門学校)

(14:30－15:00)

(休憩：15:35－15:50)

講演（共 A11 教室）（15：50～17：20）

講師紹介：高橋 俊章（山口大学）

司会：山中 英理子（広島国際大学）

「山口大学国際総合科学部における英語教育の現状と展望」

講師：藤原 まみ 先生（山口大学教授）

17:20 - 17:25

閉会式

閉会の辞

会場校責任者 折本 素（愛媛大学）

懇親会

場所：てまり (<https://tabelog.com/ehime/A3801/A380101/38002871/>)

懇親会費：4,000 円（会場で集めます。お釣りのいらぬようにご準備ください）

電話：089-934-6624

住所：松山市一番町 2 丁目 5-14 丸菱ビル 1F

移動手段：愛媛大学より徒歩 30 分程度 懇親会開始 18:15

研究発表要旨

第 1 室（共 A11 教室）

発表 1：大学英語スピーキングクラスにおける、コミュニケーション能力育成のための

ペア/個人リハーサルおよびピア/個人レビューの実践

発表者：長崎 睦子（愛媛大学）・折本 素（愛媛大学）

本研究は、グローバル社会で活躍できる大学生の育成を目標に、その基盤のひとつとなる英語コミュニケーション基礎力を身につけさせる指導法とその効果を測定する評価法の確立を目的としている。コミュニケーション能力の育成のために、授業では会話発表（成果発表）を定期的に行い、授業外ではその発表に向け、ペアおよび個人で繰り返し口頭リハーサル（練習）をする手法を用い、日常のスピーキング量を増やすことを試みている。本研究の第一プロジェクトでは、大学 1 年生必修英語科目のクラスに両タイプのリハーサルを取り入れ、学生は、(1) リハーサルを通してコミュニケーション要素の何に気づくのか、(2) リハーサルは英語コミュニケーション力を向上させるのかを検証した。その結果、ペアリハーサルと個人リハーサルでは、気づきや学習効果に違いが見られることが分かった。現在、第二プロジェクトに取り組み、英語習熟度の高いクラスを対象に両タイプのリハーサルがディスカッションやスピーチ能力にどのような効果があるのかを調査している。さらに、リハーサルの様子を個人で振り返る個人レビューとクラスメートからフィードバックをもらうピアレビューを取り入れ、両タイプのレビューが気づきやコミュニケーション能力の向上にどのような影響があるのかも調査している。本発表では、第一プロジェクトでの成果と現在実施している第二プロジェクトについて報告する。

発表 2 : Further Breaking Barriers for L2 Learners of English

Parkin, Douglas (Yamaguchi Gakugei University)

The purpose of this presentation is to further illustrate barriers which have been identified by the presenter, that are preventing L2 learners of English in Japan from learning the language purposefully and enjoyably. New data will be presented which has been gained from the presenter's English courses, that have been utilized to help discover the origins of English learning barriers. Analysis of previous research has been conducted and compared to new research, using revised techniques to better represent truer values, according to the theories and methods used. Theories regarding barriers to second language learning will be revisited such as willingness to communicate and learning anxiety, along with further studies regarding the psychology of language learning being used. Utilizing new information and updated techniques in the study, the researcher will present their findings and provide recommendations to aid in the elimination of learning barriers for L2 learners of English.

発表 3 : 大学生の会話文記憶における絵の影響－英語学習の動機づけに向けて－

発表者：ウィリアムズ 厚子（香川大学）

英語によるコミュニケーション能力の育成において、音声指導が主流となっている教室環境では、時間的制限と学習者の動機や文脈把握力の違いにより、授業内容の定着は必ずしも十分とは言えない。本研究は、授業外学習として英語で書かれた漫画を読むことが、大学生の英語コミュニケーション能力にどのように影響をするかを検証することを目的とし、その第一段階として、大学生が英語の漫画を読む時に絵をどのように利用しているかを長期記憶の枠組みで調査し、考察したものである。絵などの視覚補助と文章理解に関する研究では、視覚補助の効果が様々な方法で検証されているが、大人を対象に絵と会話文の記憶との関係を英語学習の目的で調査研究したものは少ない。また、継続や反復を必須とする英語学習において、書き言葉であり明確な文脈と繰り返し読める漫画は、学習者不安の軽減と学習動機の向上につながる会話教材であると考えられる。本研究の材料として、日本人に馴染みのある PEANUTS の 4 コマ漫画を使い、絵と会話文の記憶の関係を検証した。その結果、大学生は具体的な絵のせりふよりも、会話文の内容の面白さや意外性の高いものほどせりふを記憶していることが明らかになり、今後の研究と教育における示唆を得ることができた。

発表 4 : 英語で教える英語の授業に対する態度に影響を与える要因

－WTC, コミュニケーション不安, 有能感と英語で教える英語の授業の関係－

発表者：岩中 貴裕（山口学芸大学）

発表者は「英語で教える英語の授業」(Teaching English in English, TEE)に関する研究に従事してきた。これまでに実施した調査研究から、TEE に対して肯定的な学習者はスピーチやペーパーワークのような学習者中心の授業活動に肯定的な反応を示す傾向があることが確認できている。つまり TEE に対して肯定的な学習者は、英語を用いて「他者と対話する意志」(Willingness to Communicate, WTC)が高く、そうでない学習者と比較するとより多くのインプットに触れ、インタラクションとアウトプットの機会が多くなる。TEE に対して肯定的な態度を育てる意義はここにあると発表者は考えている。しかしその一方で、TEE に対する態度は各学習者のこれまでの英語学習・英語使用経験に基づいて形成されており、半期間(15回の授業)の教育的介入では、その態度を変容させることが困難であるという結果が得られている。本研究は、これらの点を踏まえて以下の研究上の問いに答えることを試みる。

- (1) TEE に対する肯定的な態度を半期間の教育的介入で育むことは可能か。
- (2) TEE に対する態度に影響を与える要因にはどのようなものがあるのか。

38名の学部大学生に対して調査を実施した。調査参加者は発表者が担当した授業の受講生である。収集したデータを分析した結果、1) 半期間の教育的介入で TEE に対する肯定的な態度を育むことは困難であること、2) WTC, コミュニケーション不安, 有能感は TEE に対する態度を説明する要因となること、が示唆された。

第2室 (共 A13 教室)

発表1: 処理可能性理論の示す発達段階は日本人 EFL 学習者の

スピーキングとライティングの両方から支持されるのか

発表者: 道本 祐子 (宇部工業高等専門学校)

「処理可能性理論」によるとすべての外国語学習者は同じ文法発達段階を経るとされ、その発達段階は「チャンク→文法範疇→句→文→複文」の順である (Pienemann, 1998; 2011)。この発達段階は多様な言語の L2 スピーキングを中心とした習得研究によって支持されている一方で、日本人 EFL 学習者を対象とした研究では Sakai(2008)と Eguchi and Sugiura (2015) がスピーキング・タスクを用いて実験を行った結果、「理論」との部分的な一致を示し、Michimoto (2013; 2015)がライティン・タスクを用いて行った実験からは、いずれも「理論」と一致する結果が得られなかった。しかし、いずれの研究においても理論検証の点からは課題が残されており、明らかにされていない課題には、処理可能性理論の示す発達段階が日本人 EFL の文法発達にも一致するのかをスピーキングとライティングの両方からを検証することだけではなく、ライティングによっても処理可能性理論の妥当性が証明されるのかを検討することがある。そこで本研究では、10名の EFL 学習者を対象にスピーキングとライティングのタスクを用いた実験を行い、処理可能性理論の検証を行った。結果、日本人 EFL 学習者の発達過程では、スピーキングとライティングとでそれぞれに異なった結果が得られた。本発表ではその結果について考察を行う。

発表2：小学校教員・中学校英語教員が考える ALT とのティーム・ティーチングの課題

—今治市での調査に基づいて—

発表者：池野 修（愛媛大学）

本発表では、ALT とのティーム・ティーチング (TT) の課題を小学校及び中学校の教員がどのように考えているかについて、様々な角度から調査した結果を報告する。調査内容は、(i) HRT/JTE/ALT の持つ役割や特性の重要度についてどう認識されているか、(ii) その役割や特性や役割がどの程度実際に活かしているか/果たしているか、(iii) うまくいかなかった TT 授業の特徴は何か、(iv) 従来指摘されてきた TT の課題は現在どの程度実際に問題か、(v) ALT に対して要望することなどは何かなどである。調査は 2019 年 7 月に行われ、今治市立小学校の 24 校 (28 名)、中学校 12 校 (21 名) (いずれも対象地区の全公立学校の 8 割を超える) が参加した。発表では、役割や特性についての認識と実際のズレ、小学校外国語活動の趣旨・理念についての理解欠如、授業のねらいを外れた指導、児童・生徒の持つ一般的知識や言語知識及びその個人差への配慮不足、ALT による過度の日本語使用など、今までの TT 調査ではあまり指摘されることのなかった課題を中心に報告し、この調査の結果を活用した教員研修や TT サポート・ツールについても簡単に紹介する。

発表3：高専1年生に対する体育 CLIL の可能性 (3)

—英語を使用したバスケットボールの授業を事例として—

発表者：二五 義博（海上保安大学校）

伊藤 耕作（宇部工業高等専門学校）

現在日本では、外国語の効果的な習得方法の1つとして CLIL（内容言語統合型学習）が注目されている。CLIL では、「内容」と「言語」の同時習得に加え、「思考」の発達や「協学」による学習者中心の質の高い学びが目指され、アクティブラーニングにも通じるものがある。実技教科内容と組み合わせた実践例は少ないが、二五・伊藤（2017）ではサッカー、二五・伊藤（2018）ではバレーボールを事例として、CLIL の 4C の分析から体育と英語の教科横断的な授業による利点や課題を明らかにした。本発表はその第三弾として、体育（バスケットボール）の内容を英語で学ぶことが、内容への動機づけ、コミュニケーション能力育成、思考や協同学習の視点でいかなる効果があるかを探る。研究方法としては、山口県内の国立工業高等専門学校1年生4クラス145名を対象として、CLIL の4つの軸に基づく教材を作成し、授業案をデザインした。具体的には、グループワーク、作戦タイムやメインゲームの各活動で、英語のシナリオやワークシート、“Point for English”などを取り入れ、学生が体育学習をしながら、多くのオーセンティックな場面で英語使用できるよう工夫した。英語による2回の授業実践後には、選択式（4点法）と自由記述式を併用したアンケート調査を実施した。研究結果、「内容」と「言語」のみならず「思考」や「協学」の面での一定の効果が見られる一方で、展開が速くなる試合中での英語使用の難しさなどの課題もあった。